

## 人間関係回復と宗教の社会的課題

### 背景・目的

人口減少の一途をたどる現今、生殖能力を有しない性的少数者は不可視の存在として差別され続け、宗教的・経済的・精神的に抑圧されている。またカルト諸団体は深刻な精神的・経済的痛手を当事者に負わせ、現今の経済収奪システムに容易に接合する宗教の暴力的体質を露呈している。異性愛社会と経済中心主義によって失われた人間関係の回復は、教養教育としてのキリスト教教育が教学的発想の桎梏から解放されて取り組むべき今日的な重要課題である。

### 実施内容

本研究では当事者主義が優先し、聖書学的根拠づけや文献学的論証がそれに続いた。

1) 性的少数者の当事者自身が特別講師として、自らの人生を語り、セクシュアリティに直接・間接にかかわる多方面の活動を報告した。異性愛者の固定観念—「男だからこうあるべき。女だからこうあるべき」—によって規定された社会システムの不備を具体的に指摘し、性的少数者の見えざる二重の縛り—沈黙すれば異性愛者と見なされ、カムアウトすれば蔑視される—に抑圧されることの何たるかを学生たちに考察させた。「自分が同性愛者であることは心から理解してもらいたい人以外には、むやみにカミングアウトすべきではない」という言葉には性的少数者に対する抑圧がにじみ出ている。講師は性的多様性の共有が様々なマイノリティー諸外国人や障害者、難病者など—との共生や、安心して暮らせる市民社会を形成していく上で重要な鍵となることを認識させた。

2) カルト宗教団体体験者の女性2名が特別講師として自らの体験を語り、その巧妙で陰湿な手口を具体的に紹介した。これにより学生は、カ

ルト団体からの接近は誰の身にも及んでくる可能性を認識した。生きる手ごたえを悶々として求めている時、病気に臥している時、十分に自己形成ができていない時などのいろいろなタイミングで、ヨガ教室、音楽サークル、自己啓発セミナー、SNSを通してカルト団体は接近し、特定の偏った答えや価値観、「悪」と「善」を単純に分ける二元論的な強烈な世界観を提示し、観念と現実とを逆転させる。カルト団体では権力システムと経済収奪システムが機能し、会員は自由を奪われて経済的・性的に搾取され続け、脱会後も人生に深い傷跡を残して生きざるを得ない。最近では、失われた人間関係の回復のために当事者のみならず、その家族に対するサポートも重要であるとの認識が、カウンセラーや大学関係者、弁護士などの間で確立されつつある。宗教の暴力的体質を「カルト的」と規定すれば、既成の諸宗教もその体質を免れていない。カルト団体と既成宗教との宗教学的区別は方法論的に容易ではないとする意見もある（新免論文「大学教育現場からの嘆きと希望」参照）。

### 結果及び考察

本課題の聖書学的基礎づけは、上下関係を超えて人々との交流にのめりこんでいくイエスの類まれな行動を断片的に伝える福音書物語に関する批評学的分析を不可欠とする。そこから得られたイエス時代の社会的抑圧状況に関する知見に立脚した想像力を、人間を「人材」という名のモノとして扱い、値踏みし、役に立たないとされる存在を合理性を欠くとして振り落していく現今の経済中心主義の抑圧状況に接合させる時、結果を求め、成果を数値化する傾向のある大学教育の危険性と落とし穴に学生が何らかの仕方で気づかされたと思われる。